

平成30年度3回 千葉市史跡保存整備委員会 加曽利貝塚調査研究部会 議事録

1 日 時 平成31年3月5日（火） 午後2時00分～午後5時00分

2 場 所 千葉ポートサイドタワー12階 教育委員会 委員会室

3 出席者 【委員】

谷口委員（副部会長）、岡本委員、設楽委員

【オブザーバー】

千葉県教育委員会文化財課 吉野主任上席文化財主事

【事務局】

（文化財課）滝田特別史跡推進担当課長、森本主査、大内主任主事
須賀主任主事

（加曽利貝塚博物館）高梨館長

（埋蔵文化財調査センター）西野所長、松田主任主事

4 議 題

平成31年度以降の発掘調査について

5 議事の概要

平成31年度発掘調査計画について、今回の審議を踏まえて3月22日開催の千葉市史跡保存整備委員会に諮り、平成31年度の発掘調査に着手する。

中長期的な発掘調査計画については、今回の審議を踏まえて事務局案を取りまとめた上、3月22日開催の千葉市史跡保存整備委員会にて諮り、平成31年度以降の進め方を検討する。

発掘調査体制については、今回の審議を踏まえ、今後の専門職員の採用計画へ反映する。

6 会議経過

【開会】

（事務局）

ただいまより、平成30年第3回千葉市史跡保存整備委員会加曽利貝塚調査研究部会を開催いたします。

この会議は市の情報公開条例により公開となっております。議事録は事務局が作成し、部会長の承認によって確定いたします。

本日の会議は、高橋部会長は諸事情によりご欠席ですが、半数以上の3名の委員に出

席いただいていることから、会議が成立していることをご報告申し上げます。

また、オブザーバーとして千葉県教育庁文化財課より吉野主任上席文化財主事に出席いただいております。

それでこれより会議に移らせていただきます。ここからは、谷口副部会長に進行をお願いしたいと存じます。谷口副部会長、よろしく申し上げます。

(谷口副部会長)

それでは次第に従いまして、会議を進行します。

報告1 加曽利貝塚ランドデザインの進捗について

それでは事務局より、ご説明申し上げます。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部会長)

ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

(岡本委員)

今まで千葉市史跡保存整備委員会で議論した内容は反映されていますよね。

(滝田担当課長)

はい。親会に諮問して、答申していただいた案を市としても意志決定しまして、発表させていただきましたので、今回報告させていただきました。

(谷口副部会長)

他にご意見ありませんか。

(各委員)

特になし。

(谷口副部会長)

他にご意見ないようですので、それでは次第に従い進行します。

報告2 平成30年度調査研究事業報告について

それでは事務局より、ご説明申し上げます。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部会長)

ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

(岡本委員)

金子浩昌先生の資料を寄贈していただくということですが、私も少し関わっていましたが、リストは来年度いっぱいできるということですか。

(森本主査)

来年度着手しますが、完成は未定です。

(岡本委員)

費用・日数はどれくらいを見込みますか。金子先生がお元気なうちに完成して欲しいと思いますが。

(西野所長)

具体的には4月から着手する予定ですので、ある程度始めたところでまたお知らせします。

(岡本委員)

玉川文化財研究所で基礎整理を行っていましたが、リストは作ってなかったのですか。

(西野所長)

リストは作っていただいています。

(森本主査)

そのリストに基づいて、詳細なものを作って行く予定です。

(岡本委員)

加曽利貝塚の新しい博物館を作っていく上で、金子先生の現生標本や出土資料が整うのは一番良いことです。金子先生もきっとそういうおつもりで加曽利貝塚へ寄贈されるお気持ちになったのだと思うので、なるべく早くリストを作ってください。

(西野所長)

わかりました。

(設楽委員)

金子先生の資料というのは、金子先生のもの全部ですか。それとも分散して一部ですか。

(森本主査)

基本的にはご自宅で保管されていたものを、玉川文化財研究所で基本的な整理をしていただいて、その後、千葉市埋蔵文化財調査センターで収納している状況です。

(設楽委員)

そうするとまた別にどこかにあるのですか。

(岡本委員)

早稲田大学会津八一記念博物館に寄託している資料はありませんか。

(森本主査)

あります。他にもいくつかの博物館に寄託しているものがあって、そういったものは今回の寄贈対象に含まれていません。

(岡本委員)

それもきちんとしたら引き上げて良いと金子先生もおっしゃっていましたが。それはそれで別にしても、貴重な貝塚のデータとして、加曽利貝塚で保存するのは良いことだと思います。もう1つ、加曽利E式土器の集成は今後も継続的に続けていく方針なのですか。

(高梨館長)

はい。今年度は計画を立てる上で市内のものを集めて、今後の収集方針を立てたのと、

関連講座を3回行いまして、加曽利E式土器の基本的な問題と、現在の分類編年上の課題とかを市民も含めて研究の現状というのを把握して、今年度から来年度に向けて千葉県北総部とか南部とか、県外資料というように加曽利E式土器を全て網羅するという計画です。谷口副部長からも先般の会議でご指摘いただいておりますけれども、最終的にはデータベース化してあらゆる研究者の皆様に見ていただけるようなものにしていきたいと考えております。

(岡本委員)

連続的な講座も含めて、基礎的なデータが集まったら、加曽利E式土器とはなんぞや、というシンポジウムを開くことなども重要ですね。

(高梨館長)

はい。ちなみに今年度は東関東を中心に研究者の講座もやっていただきましたから、今後は北関東西関東を含めて最終的には加曽利E式土器全体のシンポジウム、それから土器づくり同好会という団体がありまして、借用使用を含めて計測・写真撮影をしまして、複製を製作できるような体制で、新博物館等で展示等で活かせるようにしたいと思います。

(谷口副部長)

先程の金子先生の資料ですが、これは色々な貝塚で色々な機会に収集されていると思うのですが、この所蔵関係はどのようになっているのでしょうか。

(森本主査)

リスト化とあわせて、どういう経緯で入手されたか、確認していく必要があると考えております。

(谷口副部長)

自治体によっては、返却して欲しい要望も今後出てくるかもしれないし、その所蔵がどうなっているのかというのは、動物資料は難しい面があるようです。そこがどうなっているかとお聞きしました。

(森本主査)

かつて加曽利貝塚博物館で、金子先生の資料を借用し展示していたことがありまして、その資料については一度、県文化財課および出土遺跡が所在する各自治体と調整した上で先生や各自治体に返却しました。同じような対応が必要になる可能性があると考えております。

(岡本委員)

行政が引き受けるので、その手続は難しいところがあると思います。

(森本主査)

調査費用の支出も、結構あいまいなところがあり、先生がかなり自己負担でやられているところもあるので、そのあたりは先生と相談しながら進めていきたいと思っております。

(谷口副部長)

現生標本資料の今後の活用方法ですが、動物考古学の分野には研究者の方が何人かおら

れて、それぞれの方がそれぞれに現生標本を持っていて、そういうものを少しずつ使わせてもらいながら、遺跡出土のものを鑑定したりしてもらったりしているというのが今までのやり方だと思いますが、例えば加曽利貝塚にまとまった現生標本室があって、そこに利用を申し込めば、現生標本との比較や検討ができるとか、そういう活用方法にはなっていないでしょうか。

(西野所長)

最終的には、そういったことを目指していきます。場所さえあればできることなので。管理の事務的なところになりますが、まずは場所を短期的な中でできるかどうかを検討して、なるべく早くと思っています。金子先生と相談しながら。

(岡本委員)

加曽利貝塚の研究そのものにも役に立ちますし、博物館の研究の一環に位置付けることも可能です。データベースを整備して全国へ普及させて使ってもらうことで、動物考古学のセンターのような役割を担うことも考えられます。

(西野所長)

動物考古をやる学生さんを育てていくのも非常に大きなことだと思います。今までは歴博があったので西本先生がいらして、その時はあそこに行けば見せてもらえるというまとまった所があったけれど、それが港区に少しありますけど、毎日ってわけにはいかないの、そういったところが関東に1ヶ所でもあるかないかはすごく大きいとっていて、ぜひそれは実現したいと思います。

(設楽委員)

それは新しい博物館の組織体制との関わりで、そこを手厚く実現していくというところでしょうね。

今は博物館の職員の方で、動物考古学専門の方はいらっしゃらないですかね。

(高梨館長)

直接の専門家はおりません。

(設楽委員)

今日の最後の議題でまた出てきますね。

(谷口副部会長)

前にも聞いたかもしれませんが、加曽利B式土器の研究はどうしますか。忘れられているわけではないと。

(高梨館長)

はい。E式がひと段落したらということで考えています。今回の研究紀要で「加曽利 B 式土器の覚書」というのを書いていただきました。

(谷口副部会長)

わかりました。よろしいでしょうか。それではこれより報告3に移ります。

報告3 平成30年度発掘調査結果報告

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部長)

ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

(岡本委員)

基本的なことですが、発掘の次数はどのように整理していましたか。今まで13次まで来ていると思います。それを継承するのか新しくするのは決めていましたか。

(松田主任主事)

はい。今回の29年度からの調査は14次調査としています。

(岡本委員)

この委員会で議論した方がいいのではないのでしょうか。

(西野所長)

少なくとも報告はした上だと思います。注記もしていますので。

(西野所長)

御意見をいただいたのは間違いありません。そこで決定したかどうか。

(岡本委員)

グリッドなんかも新しく決めて今までのとは違うから、注記もそうなっているんだろうって思っていた。過去の議事録に残っていますか。

(谷口副部長)

今確認できますか。

(滝田担当課長)

14次としてよろしいかということの議題にはなっていないと思います。ただ、新たに半世紀ぶりに発掘調査を始めるにあたって、名称を14次調査で資料を作らせていただいたと思いますが。

(岡本委員)

まだ公にどこにも出てないですね。14次加曽利貝塚調査とは。

(松田主任主事)

資料で14次とは使っていないと思いますが。

(西野所長)

今回の地点までは14次という話をしたと思いますが。

(岡本委員)

これから新しい体制で調査をしていくのに、次数を決める議論がどうなったか、決まっていたならいいのですが。他の先生からいかがですか。

(設楽委員)

おっしゃるように、新しい体制になるということで、やっぱり今までの14次までとし

でも、どういう方向でこの加曽利貝塚を解明していこうかというところが一番だと思いませんね。

今回、晩期ということですが、全体像の中で何のために晩期を取り上げるのか、そういうグランドデザインみたいなものも必要になってくると思います。

これは最後に話があるかもしれませんが、この後に今後の調査ということでもお話あるかもしれませんが、新しい体制と絡めてやらないとダメだなと思いますね。計画・立案。ロードマップをこさえる。そうなると言葉が悪いけど場当たりのものではない。

(岡本委員)

グリッドも新しく決めて新しい体制で作って行く初めての調査で、そうすると今までの次数を引っ張っていいのかどうか。

その辺の修正は難しいことではないと思いますが。今までは、古い調査との関連もあって何とは無しに來ていますが。

(松田主任主事)

次数とは違いますが、この委員会で、遺構番号どうするかと議論したことがあったと思います。その時は、過去の調査を踏まえながら、同じ物が出たら同じ番号、新しい物が出たら、新しい番号をとということで考えていまして、今回出た住居址も85号住居と、それに加えて継承していく形で考えています。

今まで13次調査ということで総括報告書に付けていますし、新しい番号を付けて混乱させるよりは、継続していく方がよいだらうということで進めてきました。

(谷口副部長)

今後長く調査研究が続いた時に、混乱が生じるといけないから、注記が14次ということで区別されている点は、それ自体は悪くないと思います。今後懸念されるのは、発掘調査だけじゃない調査というのがどんどん入ってきますよね。そういう調査をどう位置付けていくか。発掘だけに番号を付けていくと、レーダー探査みたいなものは調査じゃないのか、未解決の土壌学的な調査みたいなものも必要になってくるかもしれないし、そういうのを整理していくかというのは課題がありますね。

(西野所長)

総括報告書の時も悩みました。試掘みたいなものでも、遺物が出ているものは情報があるので、それを入れてみたとか、曖昧なところはどうしても残ってしまいました。

(設楽委員)

今まで発掘調査以外の調査はボーリングはやってますか。

(西野所長)

ボーリング調査はやってますが、それは総括報告書で入れませんでした。

(設楽委員)

つまり第何次というのではなくて、別の物ということですね。

(岡本委員)

今度整備が入ってきたら、整備に伴う発掘はどうしますか。この調査とどう関連があるのかも必要ですね。

(西野所長)

はい。

(谷口副部長)

そういう問題提起が今日は出たので、今後、中長期的にどうしていくかを少し整理していただいて、次回また何かご提案いただいた上で議論したらいいのかなと思います。

(岡本委員)

貝塚の解明のための調査と、整備のための調査が入ってくると思うので、その辺どう考えていくのか事務局案をご提示いただければと思います。

(滝田担当課長)

そこは事務局案をまとめまして、またご相談させていただきます。

(谷口副部長)

過去の議事録をもう1度確認してください。

(滝田担当課長)

29年3月に開催した千葉市史跡保存整備委員会の議事録がありました。岡本委員から、「調査の次数を検討してください。新しい次数とするのか、続いた次数にするのか、きちんと位置づけてください。」というご意見をいただいております。

この年度は部会が委員皆様の都合があわずに開催できず、現地で委員の皆様にご意見をいただいていたので、その記録はありません。次回の会議でまたそれを踏まえて原案を作りたいと思います。

(谷口副部長)

はい。以上が報告事項です。これから議事にうつります。

議題 平成31年度以降の発掘調査計画について

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部長)

ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

(設楽委員)

これは未報告遺構の5ですか。どこまで掘るかということですが、その性格がわかるといところまでして、どういうものが出てくると性格がわかるとしますか。例えば、炉とか柱穴ですかね。

(松田主任主事)

炉と柱穴。できれば出入口とか。そういうのを捉えていきます。85号住居も中央窪地寄りの南の方に出入口ありましたので、未報告遺構5も中央窪地に向かっていくような方

向になっていると思われますので、南の方は絶対広く掘ると思います。あとは壁。

次に説明するのですが、今回の3か年の縄文晩期の南貝塚の集落構造の調査というのは、来年度の6月から11月の調査で一区切りつけることで考えています。

これはうちの内部で予算要求している考えで、改めて晩期の調査をやるということであれば、また次の中長期的な計画の中でやろうと思います。

(岡本委員)

3年でやるというのが重要で、全部やる必要があるわけではないのだけど、この大きい住居だって掘れないよね。南がいいのかどっちがいいのか検討していただいて、掘ると。人骨の問題も出ていますが、人骨も文化庁と協議して掘っていいということになったら早く手を付ける。もう1つは褐色土壌の性格。これが色々なところで見えるけど下に何があるか。全部掘らなくても褐色土層の下、一昨年やった貝層が見えているところあたりで、その褐色土層の下には何かあるかを掘っておいて欲しいのと、それから土層の中央では古いトレンチの断面は残っているけど、東西方向で、通しで1ヶ所押さえとくのも必要じゃないかと。全部掘れないにしても、最終年度なので計画的に課題についてはクリアしていく方針であってほしい。

(松田主任主事)

未報告遺構5はトレンチの配置図からわかるとおり、トレンチの間があいていますから、通しの断面ではなく空いているわけですね。ですからその辺は電源ケーブルを除去して東西になるかもしれませんが、通しの断面をとっていくことを考えています。

旧トレンチを利用するかして、未報告遺構5の通しの断面がとれていませんので、未掘の部分掘って繋げていくかたちで、通しでトレンチ断面がとれるように、考えていきたいと思います。

(岡本委員)

そうするとこれは住居址の半分というくらいだったら、南半分がいいのですか。

(松田主任主事)

南半分の方が良いと思います。今岡本先生がおっしゃったのは暗褐色ですか。黄色い土ですか。

(岡本委員)

暗褐色ではなくて、黄色い土が出ているところの下に、他のところでも客土で疑似ロームが出るところがありますよね。

そういうものの性格を押さえておく。そうすれば次は違うところを掘るとか。そういう可能性が出てくると思うので。ぜひともカラーのある写真でこういうのがあれば何でそういうことが起きるのかも含めて、黒褐色土の問題は昔からあるけれど、黄褐色土があるというのはある程度見通しがつくような。

断面の剥ぎ取りと通しでとるとというのはどういう関係があるのですか。

(松田主任主事)

剥ぎ取りの位置は最終的に決めていませんが、南北方向のトレンチの西面に良好な断面がありますが、剥ぎ取りますとその時にある程度土も剥がれてしまって、そここのところですとった方がいいのか、それじゃなくて反対側の方ですとった方がいいのかというのはまだ決定はしていません。

(岡本委員)

剥ぎ取るというのは重要じゃなくて、この発掘区の土層がどうなっているのかは基本的にどこかで抑えておくのが必要ですね。基準が。

そう考えると、北の所をずっと掘っているのがいいのか別のところを調査すれば土層がとれるのか。基本的な層位になるのは別として、その結果、剥ぎ取る必要があるのであれば、土層のロームに至る土層の形成というのは、ある程度幅を細くてもいいけれど、どこかでしておいた方がいいのではないですか。

(西野所長)

例えば北側で剥ぎ取るとなると、かなり大きなことになってしまうので。

(岡本委員)

この剥ぎ取りというのは、どういうことを考えていますか。

(西野所長)

やはり基本土層もありますし、黄褐色土の。

(岡本委員)

全部掘らなくても、ある程度黄褐色を含めたあるいは黒褐色を含めた所の層順・層の堆積がどうなっているのかを、一応ロームまでのを確認した方が、今後の調査のためになりませんか。

(西野所長)

今のところ考えているのは、旧トレンチです。そのどちらかということで、南北の住居がちょうど住居の真ん中にいっているんですけど、これの半分を掘るとなると大変なので、そういう意味でこの東西のところを見て南側を掘る位な判断ですよ。あとは他のところの調査で、貝層をどこまでやるか、人骨をどこまでやるかを考えながら早急に検討していきます。

(岡本委員)

掘れるとしたら1年も2年もかかるけれど、来年で終わるということにするのであれば、どこまでできるか。その課題自体はクリアしていく方向性を出す。

(谷口副部長)

他に御意見ご質問ございませんか。

(設楽委員)

断面剥ぎ取りは、色々な活用の方法があると思います。新しい博物館ができる展示。それに使えるのがあればいいですが。そういう方向でやるのであれば、それを睨んでの形でどれくらいの大きさのものだとか、アピール度の高い物だとかを踏まえて検討なさるとい

いのではないのでしょうか。

それとかなり盛りだくさんで大丈夫ですか。優先順位をつけるといいですね。前から議論になっている人骨は、埋めたり出したりの状態が心配なので、この貝層との関係だとか、それを検討して、できれば掘った方がいいと思います。

下に掘っていくと、新しい面に手をつけないといけないので悩ましいですけど。だから優先順位を付けていく時は、人骨というような条件が悪くなるものは一番重要になってくるでしょうが、あとは切り合い関係で新しい物から掘っていくのが原則ですね。

そうすると、今のところ溝状遺構でしょうか。未報告遺構5よりも新しい所。そうなってくると溝状遺構からやっっていこうというのが。それと溝状遺構は、全掘するわけではないですよ。

(松田主任主事)

はい。全掘するわけではありません。

(設楽委員)

早くすべきものと順序ですね。この時期の住居の晩期だと口径が非常に多い中で、85号もそうですけど、円形のちょっと角張っているけど円形に近いもの。未報告遺構5も点々を見ると円形に近いのかなという感じもしますけど。ちょっとやっぱり四角っぽいところもあるので。

だからよく古墳の周溝をトレンチを入れて、その形を確認する時にやりますよね。ああいう方法で、プランを確認するというのもやったらいいかと思います。

(岡本委員)

この、ケーブルのジョイントのところは深く掘っているんですか。

(松田主任主事)

ここの枡のところは60cmくらい掘っています。

(岡本委員)

ロームは住居の床面までは行っていませんよね。

(谷口副部会長)

遺構配置図に焼土がたくさんありますが、この焼土というのは色々なレベルで出てくるのですか。

(松田主任主事)

これは黒色土を確認した黒色土の上面で出てきます。

(谷口副部会長)

大体同じ面にありますか。

(松田主任主事)

大体同じ面ですね。下がって晩期の遺構が確認できるくらいに下げていくと、無くなります。

(谷口副部会長)

これは今、どういう理解ですか。

(松田主任主事)

今のところは層の厚さも薄いですし、明確な燃焼面もとらえられないので、小規模な焚火のようなものか、どこかで焼いたものを捨てたか、そういうものだと考えていまして、長期的にここで焼いたということは考えていません。

これがあるから黒色土に影響しているのかと、私も一時期考えたことはあるんですけど、土壌の方からすると、必ずしもそれがあるからと言って黒色土になるとも限らないというご意見をいただいているので、その辺もまた考えていこうと思います。

(谷口副部会長)

はい。ではよろしいですか。ここで10分の休憩に入ります。再開は20分を予定します。

議題 平成31年度以降の発掘調査計画について

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部会長)

かなり多岐に渡る内容の説明になりますが、ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

確認ですが、これはこの会議で、この方針を決定していくということなのでしょうか。

(森本主査)

はい。

(谷口副部会長)

この内容、掘る場所も含めてですか。

(森本主査)

そうです。先生方の御意見をうかがって、まとめて親会の方で最終的に決定していただくということを諮りたいと思います。

(谷口副部会長)

では細かい点を含めて、少し意見を言わせていただきたいところですけども。いかがでしょうか。

(岡本委員)

こういう計画でいくと。やってみないとわからないところもあるけれど、事務局で選定したところで順番は兎も角も、一応の中期的な立場でこの5か所を調査していく。

整備に関する調査との関係はどうなっているのか。体制は、今の体制の中なのか、整備は整備の体制なのか。そういう問題も含まれるし、点数にも関わっていく問題だから難しいことがあると思います。整備が始まったら、整備と本格的な調査を分けてやらないと無理かもしれないと思います。整備の方は整備の方で、続いていくのはいつまでですか。

(森本主査)

短期的な整備は2020年まで、中長期の整備が2026年までです。

(岡本委員)

それを動き出してある程度整備されますよね。それとの組み合わせというかローテーションというのは、きちんと決めないとオーバーワークになるし、整備は整備の方で、本当だったら整備の担当で考古もできる人が通しで見るという方がやりやすいと思います。今の本格的な調査の方で全部面倒見ることは、体制としてはどうですか。

(森本主査)

直近の問題として、来年度は人員が確保できていないこともあり、調査の時期をずらして説明をやる調査の体制で12月以降対応することで考えたいと思います。

それ以降はまた人員確保を進めていきたいと思います。

(西野所長)

来年度については人数が決まっているので、来年度の体制の中で緊急調査の兼ね合いの中で誰が担当するか検討します。

(岡本委員)

いずれにしても、加曽利貝塚の現状を変えて整備していくことになるので、そちらがある意味メインになりますね。遺跡の活用の、それが主体的なことになるので、その裏付けの調査とどう関連づけていくのかはこれからの問題だと思う。体制の問題もあるけれど、そうではなくこれはどう考えていくのかが重要です。

これは例えばタンクから給水のところを東西に掘る時に、ここの調査区としてグリットは図面の上では切りましたか。

(松田主任主事)

はい。

(岡本委員)

復元できますよね。だから事前に調査するというなら、その全体の中で狂う場合もあるだろうけど、方位も少なくともトレンチが揃っているという方が、後々やるなら。折角やるなら。これから整備も。いっぱいなってくるんだったら。上屋がこう向いているのは仕方ないけど、下の確認の面というのはちゃんとグリットに合わせる方がいいと思うけど。

それはこの点線の意味なの。赤い点線は発掘の基準線みたいになっているのですか。

(森本主査)

赤い線は、過去に南貝塚の集落を整備する時に電源のケーブルとかを持ってきている線ですね。

(岡本委員)

後で復元しやすい、落とし込みやすいかたちで最初に切る方が良いと思います。

(設楽委員)

私からもよろしいですか。冒頭に申し上げたように、調査研究。整備は置いておいて、

研究目的の調査ということで、その年度年度、短期的・場当たりのなものではなく、計画的にやっていくべきだと申し上げましたが、まさにこのロードマップが必要じゃないかと思っていたからです。

そういう意味で、今回出して来られたのが、短・中期とはいえかなりの長い年月にわたるものを見通す形で出してこられたのは、大変いいことだと思います。

ご努力の結果、色々な問題点がこの中に盛り込まれていて、非常にいい計画じゃないかと思えます。何度も繰り返し申し上げていますように、新しい体制との絡みで計画は動いていくべきものだと思います。そうなってくると、決定事項を親委員会に挙げるためには、決定にしないということには上げられないと思うので、それはそれでいいですが、これがある意味コンプリートなものと考えずに、見直しをかけられるものだと考えて行かれた方が良くと思います。

というのも、近々新しい博物館の組織体制の検討に入っていく。新聞報道によりますと2024年にオープンという風にお尻が切られていて、少しずれるかもしれないにしても、この5年くらいに新しい組織ができあがっていくわけですね。

そうなってくると、調査研究も新しい組織に委ねて、そこが新たにリードしていく形をとっていくんだろうと思います。

そうなってくるとその新しい組織が加曽利貝塚の調査研究をこうやって言ったらいんじゃないかという新たな発想も出てくる。そうなってくるとこれは新たなマスタープランとして非常にいい計画ですので、それを十分踏まえて初めて新しい計画を立てていくということですね。

そういった汎用性・フレキシブルな捉え方で提示していく必要があると思います。それでその上で、体制の問題、当座は現勢力でやって行かないといけないということは、それはそうだと思います。

新しい博物館の組織が固まって、人員が固まったとしても、博物館の展示やら何やらにもそこにも全力投球していかなくてははいけない。

そうなってくると、これは調査発掘にはまだ至らない。その間は現有勢力+ α で維持していかなくてはならないと思います。

それこそ長期的な考え方で50年、100年なことを考えていけば、この5年あるいは7・8年くらいは短い期間ですから、現在の状況でどういう調査研究が望ましいのかということ考えていかざるをえないと思います。

これの3年スパンで、×5で15年という短期・中期ということだと思いますが、まあその3年で果たして北貝塚1クールでいいのかという気もします。というのも人骨が大量に出てくる可能性があるということで、集落の研究ということで人骨も集落を明らかにするというので、集落の研究ということで人骨も集落を明らかにするための1つということであればそうなんです、ちょっと3年では物足りないのではないかな。だから考えようなので細かい話になりますが、北も2年間にして南・北・湿低地ということやっていく。

私が中期というくらいで南貝塚の内容を明らかにする、それくらい目で見えて調査研究をやっていく必要があると思います。北貝塚で明らかに出来たことから、それをまた次の形で深めていくと。

そういうような計画が今後必要になってくるんじゃないかというように思います。当面はこのお考えで十分練れたものになっているんじゃないかと思いますけど。

まあまあその新体制との関わりですね。新体制の中にいずれ移行して行って、こういった計画もそこで改めて練っていくということですね。ちょっと繰り返しになりましたけど。以上です。

(谷口副部長)

1～5の調査計画で、発掘地点を含めてご説明がありましたが、加曽利貝塚は全体の遺跡形成がよくわからない。中期から晩期までであるということはわかりますが、北貝塚と南貝塚の形成が時間的にどういう関係なのか、それから北貝塚の堆積物がどれくらいの時間をかけて形成されているのか、形成が連続的なのか断続的なのかとか、そういうこともまだよくわからないというのをいつも思います。先程のご説明の中で、野外観覧施設の北貝塚の住居跡群を見ても、個々の住居跡とか土坑の時期がよくわからないというご説明もありましたが、まさにそれで、遺跡形成が全体としてよく見えない。部分的には見えるのかもしれないけど、全体がどういう風にしてこういう景観が形成されていったのか、よくわからないですね。少しそこに目的を設定して、必要な調査をやっていく必要があるんじゃないかなと思いました。例えば、僕は1月にストーンヘンジに行ったのですが、ストーンヘンジも遺跡形成が全体に4期に分けられています、4期のそれぞれの年代がかなり絞られています。全体としては1500年くらいの推移の中で、段階的に遺跡が形成されていくけれど、そういうのがよく整理されている。それはやはり年代測定ですよ。溝の底から出てきた物の年代測定をやるとか、土手の内側にオーブリーホールというのが50何か所ありますが、そういうところの部分的な調査で、遺跡形成の過程がよく復元されています。ああいうことが加曽利貝塚についてもできると、いいんじゃないかと思います。

千葉県内にはたくさんの環状貝塚や馬蹄形貝塚があって、大規模な貝塚があれだけあるけれども、それがどういう過程で形成されていったかが詳しくわからないと、どういう性格の場所なのか、貝を採って食べているんだろうというのはわかるけれど、どうしてそういう場所が形成されていくかという肝心の問題がなかなかわからない感じがするけれど。

例えば、北貝塚の貝層断面みたいに露出している部分の一部ある。そういうところの断面から、少しその部分をかなり徹底的に分層して、少しずつ年代測定資料を順に上から下まで採取をして、年代測定をしていく考え方は出来ないでしょうか。

僕が今群馬県で取り組んでいる遺跡で、縄文早期中葉の1m位の灰層を去年断面を切りまして、一部分ですけど、それを分層してそれぞれのところから年代測定用の炭化物を採取して年代測定しましたけれど、そうすると長く見ても100年位の間形成されている堆積物だと絞り込まれてくる。

これは出土する土器型式からも矛盾せずそのような比較的短い年代の堆積物なんだなとある程度とらえられたんですけど、そういうことができないかなと感じるんですけど。どうでしょうか。

(岡本委員)

それを生物の関わりで今の住居を見せているところがありますよね。それを新たに別につくるとか、そういう整備との絡みでやれる話ですよ。だから今までのところを壊して上屋をそのままにするのか、隣でもいいけれど、別に新しく貝層を掘っていくと。そういうことができるのであれば整備との関わりでできる問題だと思うし、貝塚を掘ることの意味づけもできる。だからそういうようなことを加味しながら掘って行かないと、史跡の中という制約もあるから、谷口先生が言ったとおりに下から掘るといのはなかなかできないけれども、新たなところで貝層の断面を見せるんだっていうことであれば掘れるから。それで今までのところは埋め戻して保存すると新たなこともできるように私は思うんだけど。

まあそれは整備との絡みだとか、それから史跡の中をどこまで掘っていいかっていう制約があるので難しいけど、そういう展示等を含めたことをやれば。

今の展示場だってずいぶん面積が大きい。だからあれはあの当時の知識で掘ったわけだけど、その一回埋め戻して保存して、新たなところに展示とその貝塚が掘れるっていうことができれば一番いい。

(松田主任主事)

2年前に候補地を8点出した時、例えば北貝塚の貝層観覧施設も対象になりました。今回この貝層断面を修復していくのであれば、それにあわせてそれをやると、谷口先生が言われたようなことを考えましたが、今その案はないので、今回はそのような計画は出さなかったんですけども。

(岡本委員)

全体に加曽利貝塚の整備をどうやってするのかという上で、計画の中で新たに作って行くことはできるわけですし、新たな場所を下から掘るといのが難しければ、今のところを改修する時に下からずっともう1回調査し直すということはいくらでも可能だと思うけど。

(松田主任主事)

遺跡の形成の仕方がよく見えてこないということは、発掘計画を作っている私たちも痛感しております。発掘して、どういったことが明らかになっていくかと考えた時に、過去のような狭いトレンチじゃなくて、ある程度面的に掘って、その移り変わりを明らかにしていく、そしてさらにわからないところはまたある程度面積を掘って開けなきゃいけないとは思いますが。それが、北貝塚でここを掘ってとか、ここを掘ってとか、そういうことになると思うんです。まずはこここのところで1ヶ所北貝塚を掘ってみて、そしてやはりこれじゃわからないということであれば、またそれを計画に入れて行ってまた掘るといことはすべきだと思っています。

(岡本委員)

発掘の計画と整備の重要性は、整備の方がだんだん強まるというとおかしいけど、整備して特別史跡として見せるんだという方向が出てくると思う。状況が変わって、発掘どころじゃなくなるということになるのが、一番具合が悪い。後で話が出てくると思いますが、新構想でどう組み入れてくるかをがっちり決めていかないと、整備に押されてしまいますか。いつまで掘っているんだという話は常に出てくる。そうならないような計画と方針を作ってください。

(西野所長)

谷口先生のおっしゃる、大きな全体の計画というか目標のようなものがないと、なかなか1ヶ所、南貝塚をとか北貝塚をとということではなくて。一方で新しい所を開けていくというやりかたというのも継続すべきではないかなという風に考えています。

その上で谷口先生おっしゃったのは、発掘しなくてもできる部分というのがあると思うので、この中にまた組み入れるのではなくて、また別に研究テーマとかっていう外部の人とかも含めてやるというのもあると思うんですよね。その辺を含めて、我々この体制はこれからやりますけど、その中でこれを全部やろうと思ってもどんどん伸びていくだけだと思うんですよね。

(岡本委員)

だから今の中で全部明らかにしようというのは考えない方が良いでしょう。やはり、2つの貝塚がくっついているのは、これは構造的な縄文社会の中で、どういう意味があるのかは重要なことです。根本的には、谷口先生が言われたとおり2つの形成が縄文の集落の中のどういう構造的になっていく、結果としてああいうメガネみたいになっているのかってというのが明らかになれば、2つの遭遇性社会とか、色々なこと言えますが。その証明が今は何もないですね。

(谷口副部長)

先程私が述べたのは、面的に広げて掘るのが良くないと言ったつもりではないんですけども、例えば今回3年かけて掘っている部分についても、個々の遺構をかなり慎重に掘っているというのはありますけど、ああいう部分でいくつかの遺構がきちんと調査されるだけでは全体像は見えません。集落構造ということが、この資料にも出てきますが、集落構造みたいなものは、個々の遺構からはわからないと思うんですね。やっぱり遺跡形成の過程のアウトラインをまずとらえて、先程ストーンヘンジの例を挙げましたが、ああいう遺跡形成の大筋を見学に来た人に提示したいし、博物館の展示の中でも当然出していきたい。そういうところに目的を絞った調査を加えていくべきじゃないかという風なことで言いました。

あまり部分部分の調査に細かくなりすぎると、依然としてあちこち掘ったんだけど、全体がとらえきれないんじゃないかということをし心配しています。

(西野所長)

今回のところを住居を少し丁寧に掘りたかったのは、前に1つもこんなところを掘っているところがないので、例えば復元しようと思ったときに、「加曽利貝塚の住居だ」っていうのが1つもないので、それは晩期の中でというのはありました。

どっちが大事かというところも、私も辛いところで、わかっていないところで。

(設楽委員)

加曽利貝塚のこの特質を明らかにしていると。例えばメガネのようにになっている貝塚の形は、他所にはあまり見ない。それがいったいなぜなのか。もう1つは谷口先生もよく色々なところの例から挙げておられますけど、単に馬蹄形と環状じゃなくて、南貝塚も、2つのかたまりが向き合っている。先程の双分性を考えさせる。それを発掘調査なりでどうやってそのところが解明できるのかという、根本に関わってくる問題だと思います。だから晩期のことを明らかにしようというのであれば、晩期のところを掘ればいいというところになってくると思うのですが、環状が果たしてなぜなのかとか、あるいはそういうくっついていることは、どういう調査をやればあきらかにすることができるのか、アプローチできるのかという点ですね。

(谷口副部長)

北貝塚と南貝塚の形成時期が同時併存があるのかどうか、南貝塚も2つに分かれているように見えますが、この東側と西側の貝層形成は時間的に並行しながら進んでいるのかとか、そういうことは基本的な情報になるのでは。あとその貝層の下から出てくる竪穴住居の時期がどういう時期のものなのか。この下に環状の集落跡が、古い集落跡があって、その上に形成されていると思いますが、その下にある集落跡の時期がどういう時期のものなのかわかれば、かなり最初の姿がわかって、その後その上に過去の遺跡の上にこういう大規模な貝層が形成されていくけれども、その形成過程がどういうものなのか、何百年くらいかけたものでかつ同時併存的に進行していくのか。この間、山野貝塚で講演させていただいた時に調べましたけれど、やっぱり貝層形成が行われているのは大体後期中葉くらいまでだけど、あそこもウイング状に2つに分かれているように見えますが、あそこも貝層形成の期間で見ると同時併存的に2箇所があるように見えますよね。ああいったことが加曽利貝塚でもわかっていくといいのだけど。

(設楽委員)

具体的にこういう調査をやればそれを明らかにできるかということで、今谷口先生がおっしゃられたのは、松田さんが作られた集落構造貝層形成の解明というテーマだと思います。ただそれには内容が、具体的ところが少し欠けている。あるいは谷口先生が言われるような何のためなのかというこの中身をもう少し具体性を持たせて提示していただく。

また難題をふっかけるようですけど、松田さんにはそのあたりのところをやっていたきたい。

(岡本委員)

そういう何千年もかかってできたものを解明するのに、私たちは太刀打ちできないと思

うんです。

そのためにはこういう調査を通じて、15年という期間で終わるのではなく、その後の人たちが繋いで、その先にやっとなる。私たちの世代で明らかに加曽利貝塚が明らかになるということはないので、そういうような持続可能な調査体制あるいは加曽利貝塚を中心として発信できるような体制をと望みます。加曽利貝塚でしかできないことは今後あると思うので、中長期も大切だけど、その後につないでいけるような組織の在り方というのをぜひとも礎になることを考えながら進めて欲しい。

行政的にもそうだし、調査も整備も活用も。そういうことができるような体制というか見通しをぜひともお願いします。

(滝田担当課長)

今日、発掘調査計画の方向性をご相談させていただいて、方向性についてご指導いただいたので、22日の親会までに、方向性を踏まえた素案を一回見ていただいて、それを元に夏くらいまでには本当に発掘調査計画というプレスリリースできるような計画に仕上げていくということで構わないですか。

(岡本委員)

今日の意見でもこの案に反対じゃなくて、こういう課題を含んでいるし、その調査の過程で3年後にまた違う可能性が出てくるかもしれない。それはフレキシブルに考えるということでもいいのではないのでしょうか。

(西野所長)

例えば報告書に、こういう形成過程だというのはある程度書いてありますが、全然まだ自分自身も資料をどこでどういう風に出ているというのは、もう1回見直しができていないので。そのあたりをやっていって。その辺も松田さんと共有できていないので。かっちり決めるということでない方がいいのかなと思っています。

(滝田担当課長)

全体的な色々な課題がある中で、たまたま目先の10年後20年後を見据えるとこうなっていくんですけど、他にもこういう課題がいっぱいあるわけで、というのをきっちり全体像が整理できないといけないんですね。そこをもう少しいい形にして、また22日に親会の方で議論していただいてという感じでよろしいでしょうか。

29～31年度の学術調査を踏まえて、発掘調査計画を31年度中に策定しますというのが、今位置づけている当面の目標ではあります。

31年度中といっても、年度末に決まっても、32年度の人員要望・組織要望にも反映できないので、実質は31年度の夏から秋までに出来上がってオーソライズされればとは考えております。

本日、御意見を頂戴しましたので、これで進めさせていただきます。

(谷口副部長)

それでは、他に御意見ないので、最後の議題に移ります。

議題 平成31年度以降の発掘調査計画について 発掘調査体制について

それでは事務局より、ご説明をお願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

(谷口副部長)

ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

(吉野主任上席文化財主事)

最初の話にも連動しますが、先程事務局の方へ簡単に質問させていただいたのですが、2019年、2020年からは整理作業やる人と、新たに南貝塚の中央窪地の発掘をする人が出てくるんですけど、これは誰がやるのですか。先程は分担してとうかがいましたが、今松田さんと菅谷さんがやっているとうかがいました。私も西野さんも県で整理作業をしていて、配置によって何か月だけこの人が整理をやって、次はこれというように経験していて、その遺跡を継続してやっていく予算というのがあって、そうすると松田さんと菅谷さんがこの整理作業やった方が良いみたいなどころがあるんですよ。

その一方で発掘調査は誰がやるかという時に、今年度までは菅谷さんと松田さん以外の人が入らない状況で、今までの状況を良く知っている人がいない状態で新しい発掘が始まるというふうになる。それはいいのか。将来的なことを考えると、どこかで今年度来年度の2名体制を3名にするとか、技術の継承というか遺構の見方とかそういうものを学ぶ機会があった方がいいだろうと思います。それを含めて、しかしその体制が実際とれるのか。とれないんじゃないかという心配がありまして。

そういったところを具体的に誰がどういう風にやるのかということから逆算して、体制とか計画とかを立ててもいいんじゃないかと思いました。まとめありませんが、以上です。

(設楽委員)

今の話は大変重要です。行政では、自分が発掘していないのに整理をやることは、ごく当たり前のことになっています。

発掘調査だけでなく、博物館の機能は資料収集・保管・活用、諸々のものがあって、それはすごく長い蓄積が大切ですよ。それであまりコロコロ変わってはいけないということで、ずっといろというわけではないですけど、長期に渡る専従が必要になってくると思います。

ですから、新しく採用する・組織を構築する際は、そこをぜひ踏まえてください。

後の話になるかもしれませんが、埋蔵文化財調査センターの職員の方とバーターで回すことはやめていただきたい。

博物館で先程のお話ですが、専従するのが博物館には欠くことができないことでありますね。そういう風に私は思います。

(谷口副部長)

センターと博物館の現在の機能を統合した上ですか。

(設楽委員)

統合はしない方がいいと私は思います。職員の異動がない方が。現有の勢力のセンターで、博物館に置いている方をひっばって、欠員を新たに補充するというのがよろしいかと思えます。組織として合体するのは良くない。

(吉野主任上席文化財主事)

文化庁の補助金でやっている場合は、学術調査は補助対象外になりますのでご注意ください。保存目的の調査です。

(岡本委員)

今、事務局としてはどう考えていますか。博物館を新体制で作って、調査研究もできる体制をつくり、市民に活用してもらって、考古学という学問的にも加曽利貝塚の発信になるという。多ければ多いのが良いのですが、どれくらいの規模を考えていますか。

(森本主査)

内部でもこれから詰めていきたいと思えます。

(吉野主任上席文化財主事)

少なくともこの計画を提示していただいて、先生方のだいたいこの方向で考えているということになると、大体逆算するとこの調査に必要な人数は出ますよね。

(岡本委員)

埋文センターの役割は、緊急調査とそれに伴うことに配置されているわけで、たまたま人数がないからセンターから出張しているということですか。

(西野所長)

それよりも大きいのは、これから短期的なところで研究を埋文センターで始めていますが、加曽利貝塚博物館では場所がないので無理なんです。

(岡本委員)

場所の問題ではなく。

(西野所長)

でも、標本を使うと言っても場所が全くないです。作るという手は、無くはないですが、現状でできるのは埋文センターしかないです。

(岡本委員)

総括報告書の時も、結局広げるところがなく埋文センターでやることになったわけだけれども、本来は加曽利貝塚の将来像と埋文センターの将来像は別個の話ですよ。

新しい役割がそれぞれあるのだから、そこがいつまでも決まらなないと人数が整うまでできないという話になりますね。

(西野所長)

その辺の将来像みたいのところと、どういう博物館になるのかという将来像は現時点で構想はほぼゼロに近いです。

(岡本委員)

それを考えないと、人数だとかいくら欲しいとかの要望に何にも答えられない。あと3人とか適当に言うしかないよね。何の裏付けもない。

(設楽委員)

調査研究体制と博物館の新しい体制の方針をまとめるとありますが、誰がまとめるんですか。史跡保存整備委員会へまとめたものを答申するんですか。

(森本主査)

はい。基本計画の中で諮問して答申していただく。

(設楽委員)

まとめるのは、結局どこですか。

(森本主査)

最終的にご意見いただきはじめるところで案を作って、決定していただくかたちです。

(滝田担当課長)

グランドデザインと同様にこちらで案をまとめて先生方に見ていただいて、御意見を反映させてまた見ていただいて、というかたちになるかと思います。

(森本主査)

きちんと諮問答申の手続きをとっていきたいと考えています。

(岡本委員)

基本的には、今の市の体制の中で、どういう風にすればいいのかという事務局の考え方も必要だと思います。それをきちんとしないと、調査ができるところでやればいいのかというのであれば、いつまで経ってもいいということになりませんか。

(設楽委員)

まずは具体的なたたき台を出していただいて討議する方法がいいと思います。だからその時にさっき言われた埋文センターとの関係で、研究場所の問題もさることながら、組織としてどうするかというところですよ。

(岡本委員)

加曽利貝塚を継続的に発掘していくのであれば、新しい新博物館の中でそういう整理室が必要になってくる。そういうことを考えながらやっていかないと、いつまで経っても前に進まない。

(谷口副部長)

僕はあまり知りませんが、島根県の体制が良いなと思っているところがあります。埋蔵文化財センターで調査をして、自分が関わった遺跡に何かのテーマについて調査後にある程度調べて、博物館で研究成果を発表していく計画を立てる研究期間みたいなものが与えられる。それに沿って、今度は博物館の展示担当者として関連する資料を色々なところから借りてくるとか、そういうことも含めて研究成果を発信していく仕事もやると。そういう風に回していると聞いています。調査をする人は調査だけやっていて、緊急調査み

たいなものにも対応せざるを得ないからずっと調査に関わっていく。調査に関わると報告書をまとめなきゃいけないから、それに時間を取られるわけで、一向に研究成果がその中に埋没してしまって、なかなか博物館展示を通して研究成果を発信普及していくことにはつながってこない。センターと博物館の関係を、ここでうまくよりよいものにしていかないと、今後回っていかないと思うんです。

(設楽委員)

島根県の方式は、博物館の専従の人数が多ければ可能だと思うんですけど。その中の一部の部分をセンターと回す形にして。

だから博物館の職員をいつでも回ってるというのではまずい。だから博物館で繰り返すになりますけど、かなり長期的な技術を身に着けることが必要なわけですから。そういうのを核にして展示の部分で分担される形で回してもらおう。

そういう意味では、かなりこの人数を多く確保できそうだという。これはかなり希望的観測かもしれませんが。その状況であれば今の谷口先生の案も可能ではないかと思えますけれど。

(岡本委員)

その調査体制で加曽利貝塚を調査することが、日本のためにも市民のためにもどうということなんだって考えて組織作りしていかないといけない。

(松田主任主事)

今回発掘の計画しかやっていませんが、ただ発掘をして、考古学を専門とする人にはある程度還元できるというのではなくて、それが市民に還元されて、今後の整備される博物館に還元されて、理解されて、また発掘に戻ってくるというような、好循環的なこと考える必要があると考えています。

(岡本委員)

それは今やっている日常の発掘の中で発信していくということにしておかないと、具合が悪いです。

(設楽委員)

確かに首長が変われば全然違うとなってしまうことも。今は追い風でいいのかもしれないけれど。だからここを先途にやるというのも手かもしれない。

それともう1つは市長部局にするのか教育委員会にするのか、これは首長の問題で常にそうですけれど、教育委員会に属させて、地道にやっていく方がいいのかもしれない。そういう問題もありますよね。

(滝田担当課長)

市長の発言としては、このグランドデザインが決まって私が報告に入った時に、ここから先はいよいよまちづくりだから都市局の仕事だよ、といわれました。ですから整備と管理運営は教育委員会でやらせるつもりはあまりないようです。ただ、教育的な効果を粛々とやってくれ、まちづくりは市長部局へ任せてくれという雰囲気はあります。

(設楽委員)

そうなると指定管理者みたいになりますよね。

(吉野主任上席文化財主事)

市長部局が所管となると、無駄な現状変更がたくさん起きる可能性がありますね。

(設楽委員)

加曽利の中にあまり建物を建てて欲しくないです。復元家屋とか。

(谷口副部長)

そろそろ時間ですのでまとめたいと思います。

平成31年度発掘調査計画について、今回の審議を踏まえて3月22日開催の千葉市史跡保存整備委員会に諮り、平成31年度の発掘調査に着手してください。

2番目、中長期的な発掘調査計画について、今回の審議を踏まえて事務局案を取りまとめた上、3月22日開催の千葉市史跡保存整備委員会にてはかり、平成31年度以降の進め方を検討してください。

3番目は、発掘調査体制について、今回の審議を踏まえ、今後の専門職員の採用計画へ反映してください。

以上で、本日の議事を全て終了します。他に御意見無いようですので今回の会議を終了します。進行を事務局へお返しいたします。

(事務局)

委員の皆様、長時間にわたりご審議いただきありがとうございました。

以上を持ちまして、平成30年度第3回千葉市史跡保存委員会加曽利貝塚調査研究部会を閉会いたします。

——了——

問い合わせ先 千葉市教育委員会生涯学習部文化財課

TEL 043-245-5960

FAX 043-245-5993